

「発達障がいへの偏見」は、理解者の一言で解消される

各公民館や各集会所で、人権・同和教育地区別懇談会が行われています。先日、ある公民館で行われた地区懇に参加させていただきました。20 分ほどの啓発 DVD を見て話し合いを行いました。その内容は、障がいがある方、そして、外見からは分からない障がいや病気のある方をどう支援していけばいいのか考え、それぞれの方への支援の仕方を学びました。

DVD の中に大学生の「しゅうせい」という方がおられました。「しゅうせい」さんは、てんかんと発達障がいがあります。見た目では困っていることがあるとは分かりにくいのです。てんかんについては、周囲はどのように対応すればよいのか主治医さんからの話を聞きました。発達障がいによりコミュニケーションが苦手なことについては、母の広子さんから興味深い話を聞きました。中学時代に、発達障がいをよく理解して接してくださる校長先生と巡り合ったそうです。その校長先生が退職されるときに、壇上で感極まって涙を流しながら「ありがとう。ありがとう。」とおっしゃったそうです。すると、「しゅうせい」さんが「どういたしまして。」と答えたのです。その場の雰囲気をつかみにくいのが発達障がいの特徴です。すかさず校長先生は、「ナイスしゅうせい！」と返したのです。このことにより、会場はさわやかな笑いの渦となり、生徒、教職員が気持ちよく校長先生を送り出したとのことでした。

校長先生の「ナイスしゅうせい！」の言葉はどうして発せられたのでしょうか。校長先生と「しゅうせい」さんとの交流の賜物でしょう。「しゅうせい」さんのことをよく理解して受け入れていたからこそ出てきた言葉なのでしょう。この校長先生の返しの言葉によって、何が変わったのでしょうか。「しゅうせい」さんの発達障がいを知らない生徒もたくさんいたと思いますが、きっと「しゅうせい」さんのことを、楽しい子、おもしろい子と好意的に受け入れたのではないのでしょうか。校長先生の「ナイスしゅうせい！」がなかったら、変わった子と否定的に受け止める生徒が多かったのではないかと想像できます。校長先生の一言によって、生徒のほとんどが、「しゅうせい」さんのことを好意的に受け止めたことなのでしょう。「しゅうせい」さんの発達障がいを丸ごと受け止めた校長先生の言葉が、その場にいた多くの人々の心を変えたのではないのでしょうか。

私たちの周囲にも、発達障がいのように見えにくいものがあると思います。変わった人と見える方は何に困っているのだらうと、こちらが見ていくことが大切なのではないかと考えます。コミュニケーションを取る中で困っていることを見つけ、その方に対してどのように接していくかが私たちの課題ではないのでしょうか。